

近松の一断面

浅野 達 三

今日近松門左衛門の作品の中で文楽や歌舞伎にしばしば上演されるものは、殆んど竹本座の座附作者として竹本義太夫及びその一門の為に書かれたものである。もともと近松は都万太夫座で歌舞伎狂言を書いていたのであるが、歌舞伎は俳優の容色あるいは伎芸本位のものであり、どこまでも役者が主で脚本はそれに従属したものであった。坂田藤十郎とか水木辰之助といった風の名優と称される人々がこの座には多く居たが、結局役者の芸風を充分に發揮させればよく、作品の本質もそれによって決定されて来る様な環境では作者が筆を自由にふるう余地は少く、青年近松が飽き足り無いものを感じていたのも当然の事であろう。事実歌舞伎に於ける狂言作者の地位は、此時代に限らず江戸後期に於いても非常に低いものだった様で、今日番付面にあらわれる狂言作者なるものの役割から考えてもその役割の大体は推察されるだろう。

近松は都万太夫座の作者をする傍ら、一方四条河原の操芝居宇治嘉太夫(加賀掾)の為に浄瑠璃も書いていた。天和、貞享の頃である。嘉太夫は浄瑠璃の中に歌舞伎的趣向を織り込んだ点に特色が認められるのだが、歌舞伎の作者をしていた近松の事であるから、嘉太夫の好みに合う様な浄瑠璃を書くにはうってつけであった事は想像に難くなく、又歌舞伎に比して操芝居の方は一応太夫によって浄瑠璃の詞章がそのまま語られるものであって見れば、作者の蒙る制約もはるかに少い訳であり、近松もここに可成りその才能をあらわし得る面を持った様である。

次に、一時嘉太夫の門弟でもあった大阪天王寺の出身百姓五郎兵衛こと清水理太夫が、延宝五年の暮四条河原に独立の小屋を持つて興行した。然し井上播磨風の豪快な語り口で、然も大音が評判の理太夫は織細を喜ぶ都人には受入れられず、この興行は半年も続かなかつた。この頃竹庄と

称されていた興行師の竹屋庄兵衛が理太夫に目をつけ、新しい一座を組むことになった。名も竹本義太夫と改め、貞享二年大阪道頓堀に櫓をあげたのが竹本座の始まりである。この旗挙げ興行に近松の「世継曾我」を上演して大変な評判を得、後に義太夫節と称される事によつても解る様にその地位は固まった訳である。義太夫は操芝居に於いての浄瑠璃詞章の占める位置の重要さを痛感していた様で、当時はまだ京都に居た近松門左衛門を訪ねて自分の為の新作を頼んだ。この依頼によつて貞享三年二月近松が書き与えたのが「出世景清」で、これ以後ずっと義太夫の為に浄瑠璃を書いて行くことになった。義太夫は近松を非常に重んじた程で、従来この様な例は見られなかつた事である。自分の文筆を自由に伸ばし、芸術的な感興を作中に思い切つて表現出来る太夫を得て、近松も充分にその才筆をふるうことが出来た訳である。その後義太夫は元禄十四年五月に筑後掾を受領し、更に十六年五月には世話物の第一作「曾根崎心中」が大当りをとつたが、宝永二年竹田出雲が竹本座の座本として興行に乗り出すことになったのを機会に、近松は都万太夫座を出て大阪に下り、以後正式に竹本座の座附作者として筆をとることになった。ここに名作の数々が生み出されるに至つた次第である。

近松の浄瑠璃は百余りを数え得る。大体歴史的な面に題材をとつたいわゆる時代物と、現実社会に起つた事件を材料とした世話物とに分けられるが、時代物は近松作中の大部分を占めており、劇的な構成で種々注目すべき点がある。これに対して世話物は廿四篇に過ぎないけれども概ね近松晩年の作であり、円熟した筆の運びが見られて文学的価値の高いものが多く、又題材が身近な点からも興味を惹くのですべて傑作と称されている。

この世話物はもともと今日で言えば新聞の社会面に出た記事を題材とした様なもので、言わば見物人と同時代、同じ階級、同じ場所の人々が登場するのであり、それだけ所謂身につまされることも多く、観客の共感を呼んだのである。自分達の全然見知らぬ世界の事ではなく、軒を並べている社会の事であつて見れば、誰もが多少の可能性も持っていることになる。関心と興味が多かつたのも当然の事である。世話物はすべて男女の情事からんで展開しているが、当時の社会的な制約の許で彼等が希望を達する為には、現実生活を否定して彼岸に楽土を見出そうとの結末になつて来る。これを描いたのが世話物の中でも特に注目される心中物である。封建社会にあつては自由な恋愛の路は閉ざされて居り、自分の意志通りの生活に入ることは認められなかつた。ここに現世で結ばれることの出来ない男女の

種々の悲劇が生じて来る訳である。

個人よりも家乃至は社会の存在の方が大きい時代にあつては、結婚に自己の意志をはさむことは殆んど許されないことであつた。又結婚してからも夫婦間の愛情よりは家にうまく入り込むことがもつと重要であつた。こんな時代であるから当然相思相愛の男女が、添いとげられないのを苦にして死んで解決を見出そうとする筈であるが、ここで注意すべきはそうした恋愛至上主義の心中が不思議に少いことである。勿論近松は人間性をおさえつける様な時代の風潮を快く思わなかつたからこそ、情死を描いてそこに温い涙を流し、多くの人の共感と呼んだのではあるが、然し近松の描いた心中は必ずしも今日我々が想像する様な純粹なものの許りでもなかつた様である。

この点について園田民雄氏（浄瑠璃作者の研究）は何処迄も金銭的な問題とされている。例えば「心中天の網島」の治兵衛も、金さえうまく都合がつけば心中しないで、恋しい女との間もうまくやって行つたに違い無い。貞淑なおさんに対しての面目なさや、恋敵の太兵衛に小春を請け出される悲しさ、などではなくて

「太兵衛めがるんげんこき、治兵衛身代いきついでの金に詰つてなんど、大阪中を触廻り、問屋中の附合にも面をまぶられて生恥かく」

どこして悲劇の主人公を作り上げている、というのであつて興味深い考え方である。成程程中物の主人公は何れも齒がゆい煮え切らぬ人物である。たしかに健康で正常な神経の持主ではない。然しそれも今日の我々だからこそ言えるのであつて、自由な意志の発露の方法もなかつた當時に於いては真にやむを得ない事なのではなかつたらうか。

死を以て事を実行するという方法は、元來侍の処置であつた。ところが町人の生活が向上し、侍の世界をも自分達の経済力で把握していることが明瞭になつて来ると、町人でも侍の生活を実行出来る信念を持つに至つた。この一の現れとして「心中死」即ち心中を見ることが出来る、というのは守随憲治博士（世界評論社・近松）の説であるが、これも納得出来る一つの考え方であらう。勿論この様な心中は時の社会をかき乱し、世間に大きな影響を与えた様である。後には心中物上演禁止の布令まで出された位であるから可成り多くの人々の心を打つたに違い無い。然し多くの人々が心動かされ、興行が成功したのは矢張りそれだけ一般的な人間心理を描き出しているものと考え度い。事実義理のしがらみに悶える人間の姿、人情の機微に触れる構成、には時代に対する一つの示唆があり、人間性の真実を見出そうとの動きがあるものと考えられる。

近松の作品は多く改作に依つて上演されている。丹波与

のが辛いのだ。金がないと世間から思われて商売が出来なくなるのがおそろしい為だ、と例証しておられる。事実町人は金銭、及びそれに就いての信用を第一番のものと考えている。町人が武士に対抗出来るのは金だけである。当時経済的には次第に困窮を来しつつあつた武士に対して、相変らず位は下であるが、経済的な実力を持つていた町人の隠れた勢力が増大して来た時代であつて見れば、先の様な考え方も可能であろうが、然し金だけで総てが解決するというのは如何であろうか。勿論金銭的な問題が、事件の相当大きな誘因になつたであろうことは想像に難く無い。けれども幾ら実利を重んずる時代であつても、男女間のことがすべてそれで割切れるとは思われないのだが。

又高野正巳氏（日本古典全書・近松門左衛門集）は、心中物の主人公はすべて意思薄弱な性格破産者である、とされている。そして、性格的に欠陥のある人生の敗残者、意思薄弱な憐むべき存在であるから、作者が意識的に主人公に対して同情の筆を加えねばならなかつた。その為には敵役を設け、純情な主人公が敵役の術策に陥つて破滅に導かれる、とするのが最も安易な方法である。天の網島の太兵衛・曾根崎心中の九平次・生玉心中の長作など、殆んどの心中物に出てくる敵役は意地悪い言動によつて観客の憎しみを一手に引受け、ここに性格破産者の主人公に一種の擬装をは

作は吉田冠子・三好松洛の「恋女房染分手綱」で、冥途の飛脚は並木正三の「恋飛脚大和往来」を逆輸入し、天の網島は近松半二の「心中紙屋治兵衛」若は「時雨の炬燵」といつた如きである。これらは何れも複雑な舞台技巧とか歌舞伎的手法の導入等の為により替えられたのだが、然し徒らに登場人物を多くし、舞台効果をねらつたものよりは、矢張り近松の筆になるものを中心としてそれを充分語り活かすのが本旨と思われる。事実丹波与作の「道中双六」や「重の井子別れ」の如き、原文の名作なる余り改作に於いても全くそのままとり入れて改める箇所を見出せなかつたのもある位である。最近原曲尊重の声が強いのは望ましいものと思う。特に古典の詞章をそのまま舞台芸術として表現する数少ないもの一つとして、演劇の一の台本としての近松の作品を新しく見直して行くことが今後の課題としては必要なものであらう。

（夏季講座講演草稿の為、いささか簡に過ぎる点がある様に思うが、一応そのままにしておく。）